

一八八五年四月六日(月)

カルカッタの信者の家における聖ラーマクリシュナ

バララームの家で内輪の信者たちと

だいぶ前に時計は三時を打った。チョイトロ月なので日射しは恐ろしいほどだ。聖ラーマクリシュナは一、二の信者と共に、バララーム家の応接間に坐って校長と話をしておられる。

今日は一八八五年四月六日、月曜日。チョイトロ月二十五日、黒分七日目。タクールはカルカッタの信者の家に來られた。何人かの信者たちに会ってから、ニム・ゴースワミー横丁のデベンドラの家に行らっしゃる予定である。

〔真実の言葉と聖ラーマクリシュナ——若いナレン、バブラーム、プールナ〕

タクールは神の愛に終日酔^{ひねます}っておられる。大方の時間は半三昧状態か入三昧境で、外部に全く心が向いておらず、ごく親しい内輪の信者たちが真我を覚えることだけを熱望しておられる——それはちょうど、父や母が西も東もわからぬ子供達の身を気づかい、また、どのようにしてこの子らを成人させ

たものかと心配しているのと同じように見えた。または、鳥がヒナを育てるのに一生懸命になっているような風情でもあった。

聖ラーマクリシュナ「(校長に向かつて)——三時頃行くってお前に言ってしまったから、ちゃんと来たよ。それにしてもひどく暑いねえ」

校長「まったく！ さぞ大変でございましたでしょう」

信者たちはタクールをせつせと扇いでいる。

聖ラーマクリシュナ「若いナレンと、それからバブラームに会いに来たんだよ。おや、どうしてプールナを連れて来なかったんだい？」

校長「心配で来られないのです。あなた様が大勢人のいる前であの子をお褒めほになるので、後でそれが家の人たちの耳に入りはしないかと——」

〔学者たちの教えとサードゥたちの教えは異なる——サードゥと交際すること〕

聖ラーマクリシュナ「フーン、それもそうだね。それじゃ、これからはもう言わないことにしよう。そうだ、お前はプールナに宗教上の指導をしてやってるそうだが、そりゃいいことだよ」

校長「その他にも、ヴィディヤサーガル先生の著書の抜粋を教科書にしております、そのなかにあの言葉があるのでございます——『身(原典註)と心と命をつくして神を愛せよ』という。こういう教えをきいて保護者たちが腹を立てるとしましたら、どうしたらよろしいものでしょう？」

聖ラーマクリシュナ「本にはそういうようなことが沢山書いてあるけれども、書いている人自身がよくわかっていないんだよ。サードゥとつきあっていればわかってくる。ほんとうに欲を捨てたサードゥが教えてくれるなら、人はその言葉を素直にきく。ただの学者が本に書いたり言葉で聞かせたりしても、そんな言葉は人にはよくわからないものだ。医者が大きな糖蜜のかめをそばにおいて、病人に糖蜜を食べると言っても、病人はいい加減に聞いている。

ところで、プールナのことをどう思う？　バーヴァ(霊的興奮)の状態になることがあるかい？」

校長「バーヴァの状態が外に現れるのを見たことはございません。いつか、あなた様のあのお言葉を彼にきかせてやりました」

聖ラーマクリシュナ「どんな言葉だったけ？」

校長「あのことです！　普通^ナの大きさの器なら、バーヴァを抑えることはできない。だが大きな器の場合は、内部で強いバーヴァが起^ナこつても外に表さない。大きな湖に象が入つても跡も残さないが、水たまりに象が入ると大へんな騒ぎになって水が外にまではね散る、と」

聖ラーマクリシュナ「あの子はバーヴァを外に出さないだろう。型がちがうんだよ！　そのほかの特徴^ルもみんないいね、どう思う？」

校長「両眼が実によくかがやいていて——前に突き出ておりますね(秀れたヨーギーの人相の一つ)」

聖ラーマクリシュナ「両眼がかがやいているだけじゃだめなんだよ。神聖な目は、また別なんだ。うんそうだ、訊^キいてみたいかい？　(タクルに会った)後でどんなふうだったたい？」

校長「はい、いろいろ話し合いました。彼はここ四、五日ずつと言いつづけております。神のことを想ったり御名をとなえたりすると、きまつて目から涙があふれて肌毛が逆立つ、と」

聖ラーマクリシュナ「それでもう十分だ！」

タクールと校長はしばらく黙っている。やがて校長が口をきつた——「彼は待つております」

聖ラーマクリシュナ「誰が？」

校長「プールナです——多分彼は、自分の家の戸口のところに立つておりますよ。私たちの誰かが通りかかると、かけよつてきて合掌してあいさつするのでございます」

聖ラーマクリシュナ「アハー！ アハー！」

タクールは枕にもたれて休んでおられる。校長は十二才になる少年を一人連れてきていた。彼の学校の生徒で名前はクシーロド。

校長「これはとても良い子でござりますよ！ 神さまの話をとて喜んで聞きます」

聖ラーマクリシュナ「(にっこりして)——鹿ぬかみたいな目をしてるね」

その少年はタクールの足に手をふれて、額ぬかずいてごあいさつ申し上げた。そして、非常に信仰深い

(原典註一) With all thy Soul love God above. And as thyself thy neighbour love.

『汝の魂をすべて尽くして、天にまします神を愛しませ。汝自身を愛するが如く、隣人をも愛しませ』

——マタイによる福音書 22章 37～39節——

態度でタクールの足をさすりはじめた。タクールは信者たちと話をしておられる。

聖ラーマクリシユナ「(校長に)——ラカールは自宅うちにいるんだよ。オデキができていて、体の具合がよくないんだ。子供ができるとか聞いたがね」

パルトゥとビイノドが正面に坐っている。

聖ラーマクリシユナ「(パルトゥに向かつて笑いながら)——お前、お父さんに何て言ったんだい？(校長に) この子は、お父さんに口ごたえしたんだよ、ここへ来ることで。(パルトゥに)——何て言ったんだ？」

パルトゥ「こう言いました。ハイ、ぼくはあのかたの所へ行きます。それが、どこが悪いんですか？(タクールと校長、笑う) 必要なら、もつと、もつとやってやります」

聖ラーマクリシユナ「(校長に) アハハ……、それほど言わんでもいいよなあ！」

校長「はあ、あんまり言いきるとよくありませんね！」

聖ラーマクリシユナ「アツハツハツ……(ビイノドに向かつて)——お前はどんな具合だね？ あつちトクネノシラ(南神寺)へ来ないじゃないか？」

ビイノド「はい、行こうとしたのですが、また心配になってやめました！ ちょっと病気があつて、体の具合がよくないんです」

聖ラーマクリシユナ「わたしといっしょに南神村トクネノシラにおいて——。空気がいいから、体の具合もよくなるぞ」

若いナレンが入ってきた。タクールはお顔をすすぎにいらっしやるので、若いナレンはタオルをもつてタクールに水を注いでさしあげるため従^ついて行つた。校長もいっしょに行つた。

若いナレンは西のペランダの北隅で、タクールの足を洗っている。校長はそばに立っている。

聖ラーマクリシュナ「えらく暑いねえ」

校長「まったく、暑うございますね」

聖ラーマクリシュナ「お前、あそこでどうして暮らしてる？ 二階の部屋は暑くなるだろう？」

校長「おっしゃる通りで！ ひどく暑くなります」

聖ラーマクリシュナ「それに奥さんは頭の病氣なんだし、涼しいところに住ませなけりや——」

校長「そうなのでございます、はい。階^{した}下の部屋で休むように申しつけております」

タクールは再び応接間に戻つてお坐りになって、校長に、「この前の日曜にどうして来なかつた？」とお聞きになった。

校長「はあ、家に誰もいなかったものですから——（家内の頭の調子がよくないのに）誰も世話をする人がおりませんので失礼いたしました」

タクールは馬車にお乗りになってニム・ゴースワミーの横丁にあるデベンドラの家においでになった。お伴は若いナレン、校長ほか、二、三の信者である。馬車のなかでもプールの話がでて、タクールはさかんにプールナに会いたがっていらっしやる。

聖ラーマクリシュナ「（校長に向かつて）——大そうな器だよ！ さもなけりや、わたしがあの子の

ために称名しようという気になるものか。しかも、あの子はそんなことは何も知らないんだ」

校長ほか信者たちは、タクールがプルナのためにわざわざ種字真言レシヤマントラをとなえていらつしやることを聞いて、とても驚いた。

聖ラーマクリシュナ「今日、あの子を連れて来ればよかつたのに——。なぜ連れてこなかつたんだい?」

若いナレンが笑つたのを見て、タクールも信者たちも皆笑い出した。タクールは楽しそうに若いナレンを眺めながら校長におつしやる——「見る、見る、キャッキヤと笑つてるよ。無邪気なもんだ。心のながきれいサツパリしているものだから——三つのことを考えないから——土地と、妻と、お金と。女と金からすっかり心を放さなけりゃ神さまはつかめないよ。

タクールはデベンドラの家にお入りになる。トツキネンヨル南神寺で先日デベンドラに向かつて、「いつか、お前

の家に行くよ」とおつしやつたのである。するとデベンドラは、「私も、そのことをお願いしに今日来ましたのです。この日曜日ニに、ぜひおいで下さいまし——」と答えた。タクールはおつしやつた

——「でも、お前の収入みいりは少ないから、あんまり大勢の人を招よぶなよ。馬車代だつて大変だし!」

デベンドラは笑いながら答えた——「収入が少ないことが何だつて言うんですか。バターが食べたければ借金すりゃいいです」タクールはこの言葉をきいて笑い出し、いつまでも、いつまでも笑いつづけておられた。

やがて家につくと、タクールはすぐおつしやつた。——「デベンドラ、わたしの食べるもののこと

にはかまわなくておくれ。ホンのちょっとしたものでいいからね。——体の具合があんまりよくないんだよ」

デベンドラの家で信者たちと

聖ラーマクリシュナは、デベンドラの家に応接間で、信者たちに囲まれて坐っておられる。応接間は階下にある。日が暮れて部屋には灯火ランブがあかあかとしている。若いナレン、ラーム、校長、ギリシユ、デベンドラ、アクシャイ、ウペンドラ等々、大勢の信者たちがタクルのそばに坐っている。タクルはある一人の若い信者を見て、嬉しくてたまらないような表情をなさる。その人を指して、信者たちに向かつておっしゃる——「この子はね、さつき言った三つのものを全然考えていない！ その三つ——それで人は縛られているんだよ。土地と金と妻——この三つに執着しているかぎり、至聖かみに心を統一ヨ、ガすることはできない。(その信者に)——何か、また見たって？ 言ってごらん、何を見たんだい？」

〔女と金の放下とブラフマンの歓喜〕

その信者〔笑いながら〕——それが、糞の山なんです。ある人はその山の上に坐っていますし、ちょっと離れたところに坐っている人もいるのです」

聖ラーマクリシュナ「神のことをすっかり忘れた俗人どもの有様を見たんだよ。そして、この子は、

心のなかから世俗的なもの一切合切捨てようとしているんだ。女と金から、もし心を去らせたなら、もう何の恐れも心配もあるものか！

ウーン！ すばらしいなあ！ わたしなんか、さんざ称名や瞑想をしたあげくに、やっとそういう心境になれたんだよ！ なのにこの子は、どうしてこんなに速く心の掃除ができてしまったんだろ！ 色欲をなくすということは容易やさしいことじゃないのに！ わたしでさえ修行を始めて六ヶ月後に、(欲情みたいなものが出てきて)何となく胸のあたりに妙な気分がしたもんだよ！ そのときは樹の根元にぶつ倒れて、大声で泣き出してね！ こう言った——『マー！ こんな気分になるんなら、いつそ喉をかき切つてしまおう！』

(信者たちに)——女と金が心から出て行ったら、あとに何が残る？ そうなれば、あとはブラフマンの喜びだけになる」

シャシー(後のスワミ・ラーマクリシュナーナンダ)は近ごろ、タクールの許に出入りするようになったばかりだ。彼はヴィディヤサーガルの大学で、B・A(バチユラー・オブ・アーツⅡ学士課程)の第一学年目^{カレッジ}に在学している。タクールはこんどは彼の話をなさる。

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに)あの青年は、しばらくの間は金のことを時々考えるだろうよ。だが、もう全く考えない青年も何人かいる。それに、何人かは結婚もしないだろう」

信者たちは静まり返つてじっと聞いている。

「アヴァターラを見分けられるのは誰か？」

聖ラーマクリシュナ「(信者たちに) 心から女と金がすっかり無くなつてしまわなければ、なかなかアヴァターラを見分けることはできないよ。ナスビ売りにダイヤモンドの値段を聞いたたら、『この代りに九シア(6.9kg)のナスビを出そう。それ以上、一個も余計にやれない』と答えた」(皆笑い、特に若いナレンは大きな声で笑いこぼげた)

タクルルは、若いナレンがこの話の意味を即座に理解したことを見てとられた。

聖ラーマクリシュナ「この子は全く聡いなあ！ ナングタもこんなふうにすぐわかつた——ギターやバーガヴァタに書いてあることの意味を、すぐに悟つたものだ」

「少年時代からの離欲のすばらしさ——売春婦はどうすれば救われるか」

「若いうちから女と金を捨てるというのは、こりゃほんとに驚くべきことだ。ホンのわずかの人にか起こらないことだよ！ そうならないのは電ひように打たれたマンガーのようなもので——神さまにも供えられないし、自分で食べるのもイヤだ。

若いうちはさんざ悪いことをしたが、年寄りになつてから称名にはげんでいる人もいる。まあ、何もしないよりはマシだが……。

何とかマリックという人のお母さん、大そうな家柄のところの娘だった人！ その人が、『売春婦などでも救われるものでしょうか？』ときくんだよ。自分がずっと以前に、それに似たようなことを

ずいぶんしてきたらしいんだ！ だからそんなことをきくのさ。わたしは答えた——『ハイ、救われますよ。心の底からざんげして、泣きながら神様に祈って、もう二度とあんなことは致しません、と誓えばね』

ただハリの名をとなえるだけじゃどうにもならない。心の底からざんげして泣かなくてはダメだよ！——

デベンドラのところまでキールタンを楽しみ三昧に入るタクール

こんどは長太鼓とシンバルに合わせてキールタンがはじまった。キールタン歌手は歌った——
(師ケーシヤブ・バラティが聖チャイタニヤの得度式を行ったときの歌)

ああ何という光景だろう——

師ケーシヤブ・バラティの庵いむらのなかで

聖ガウランガは不思議な光につつまれて

神の慈愛のよろこびに

あふれる涙は百の川になって流れた

ガウルは狂った象のように

愛に酔いしれて踊り、歌い

大地にころげまわり涙の川で泳ぎ

泣きながらハリを呼ぶその声は

天と地にとどろきわたった――

そして、齒にわら草をくわえて

頭を垂れて手を合わせ

神の僕しもべとして家々の戸口かどに立ち

救いの道を語り歌った――

頭には巻き毛、ヨーギーの衣をまとい

信仰と愛に泣き、命を燃やして

人びとの悲しみをわが悲しみとし

一切を捨てて神の愛のなかに住み

聖なる愛のしもべとなったチャイタニヤは

家々の戸から戸へと語り歩いた

齒にわら草をくわえて―― ヴィシシュヌ派で、
とても謙虚な態度を表現する慣用句

タクールはこの歌をきいているうちに、前^{パルツァ}三昧状態になられた。歌手は聖クリシュナとの別れを悲しむヴラジャの牛飼いたちの歌をうたう――

ヴラジャのゴビーたちは、マードヴァイー(香りの高い花を咲かす草の一種)の茂みのなかでクリシュナを探している――

ね、マードヴァイー！ 私のマードヴァアを返しておくれ！ マードヴァア――クリシュナの一名。マドゥの

(さあ、さあ、さあ、マードヴァアをおくれ！) 子孫の意味。

私のマードヴァアを私におくれ

さもなきや根っこを掘って探す

魚にとつての水のように

私の命はあのマードヴァア

(お前が隠しているのだろ、ねえ、ね、マードヴァイー返しておくれ！)

(私は弱いけど一途な女、もうもう私は死にそうだ)

(マードヴァイーよ、マードヴァイーよ、マードヴァアがなけりや、恋しいマードヴァアが見つからなけりや)

タクール、聖ラーマクリシュナは、時々即興句をお入れになった――

そのマトウラーまでどれほどあるの?!
そこに私の恋人がいるの!

タクールは三昧に入られた! 不動の体! 長い間、その状態のままでおられた。

タクールは少し平常にお戻りになる。しかしまだ、半三昧である。その状態で信者たちと語られる。そして時々、宇宙の大実母ともお話になる。

聖ラーマクリシュナ(恍惚として)マー! あの人を引っぱっておくれ! わたしはもうこれ以上、心配しきれないから!

(校長に)——お前の親類の人(義兄弟)——あの人にちょっと関心があるんだよ。

(ギリシユに)——お前ははずけずけ物を言ったり、悪態あくごをついたりする。それもいいさ、そういうものは皆、口に出してしまった方がいいのさ。毒血のために病気になる人がいるが、毒血を外に出せば出すほど体にいいんだ。

ウパーデイ(訳註)が崩壊くずれるときには音をたてる。木が燃えるときはバリバリ、パチパチと音をたてる。

(訳註)ウパーデイ——肩書きや称号など、無智のためにアートマンの上に重ねられた限定。例えば——私は学者だ。
私は何某の息子だ。私は金持だ。私には身分がある。——これによって俗世間に縛られている。

すっかり燃えきってしまったえば、もう音はしない。

お前は、日に日に清まって行くよ。一日一日と進歩するよ。人が見たらびつくりするだろうよ。わたしは、なみたひそう度々は来られないかも知れん——でも、それでいいんだ。お前は自分でやりとげられるよ」

タクール、聖ラーマクリシュナの霊的気分は、また一段と深まってきた。再び、大実母ママと語り合っておられる。「マー！ もともと善い人を良くしたって何の手柄になる？ マー！ 死人を殺して何になる？ ピンピンして立ってる人を殺してこそ、はじめてあんたはえらいと言えるんだ！」

タクールは数秒、黙っておられたが、突然声高におっしゃった——「わたしはドツキネーシヨル南神村から来たんだ。いま行くよーウ、マー！」

まるで小さい子供が、遠くから母親に呼ばれてそれに答えているようだ！ タクールは再び不動の姿勢で三昧に入られた。信者たちはまばたきもせずにもそのお姿を見ている。

タクールは再び半三昧でおっしゃる——「わたしはもう、ルチを食べないよ」

同じ町内から来ていた二、三人のヴィシヌヌ派説教師ゴーストは、このとき席を立てて行つた。

タクール、聖ラーマクリシュナ、デベンドラの家で信者たちと共に

タクールは信者たちを相手に上機嫌で話をしていらつしやる。チョイトロ月で、その暑いこと暑いこと！ タクールと信者たちをもてなすために、デベンドラはアイスクリーム(タルフィ)を用意して

いた。信者たちもアイスクリームを食べて大喜びである。校長は静かな声で、「アンコール！ アンコール！」と言った。(つまり、アイスクリームのお代わりということ)。皆は大笑いした。アイスクリームを見たタクールは、まるで子供ののように喜びはしゃいでおられた。

聖ラーマクリシュナ「いいキールタンだった。ゴーピーたちの様子がよく現れていたよ。ね、マードヴィー、私のマードヴァを返しておくれ。ゴーピーたちは愛に酔っていたのさ。すばらしいことだねえ！ クリシュナを慕って気狂いみたいになつていたのさ」

ある信者がもう一人の信者を指して言った。

「この人は、女友達の態度を」とつているのです。ゴーピーのようない——」

ラーム「いや、この人のなかには二通りの態度があるのです。やさしく甘い気持ち(マドゥラ)と、それから智的なきびしい気持ちと……」

聖ラーマクリシュナ「何のことだい？」

タクールはこんど、スレンドラの話をなざる——

ラーム「私が知らせたのですが、来ませんでしたね」

聖ラーマクリシュナ「仕事が終わつてからじゃ、(疲れて)来られないのさ！」

一人の信者「ラームさんがあなた様のことを書いておられますよ」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハ、いったい何を書いているんだね？」

一人の信者「大覚者の信仰バラマハンサという題で書いていらっしやるのです」

聖ラーマクリシユナ「それじゃナンだね、ラームは大いに名を挙げることになるだろう」

ギリシユ「あつはつは……。彼はあなた様の弟子だということ——」

聖ラーマクリシユナ「わたしや、弟子とか門下とかいうものは持たないよ。わたしはラーマの家来の、そのまた召使いだ」

近所の人たちが誰かれとなく入ってきた。しかし彼等を見て、タクールはあまり喜んでおられない。タクールは一度だけ、「この辺はどういう町なんだろうね！ これぞという人間はいないなあ」とおっしゃった。

デベンドラはタクールを奥にご案内して、軽食を差し上げた。タクールはニコニコ顔で奥から戻ってこられて、また応接間の席にお坐りになった。信者たちが囲りに坐っている。ウペンドラと

(風集註3)

アクシヤイがタクールの両わきに坐って、お足をさすっている。タクールはデベンドラの家の女性たちについてお話になる——「いい娘たちだよ、田舎から出てきたと言うからね。とても信心深いよ！」

タクールは内からの喜びで満たされておられるのか、楽しそうにご自分から歌をうたい出された！
どんなお気持ちで歌っておられるのだろうか？ ご自分の境涯を思い返して味わっておられるのだろうか？

歌——素直サハジヤにならなけりや、素直サハジヤなお方サハジヤ(神)に会えやせぬ

歌——托鉢のお坊さま お待ち下され

かがやくお顔をお見せ下され

お止まり下され そして——

お姿を拜ませて下されや

托鉢のお坊さま——イスラム教の遍歴僧スー
フィーのこと

歌——法悦に酔った坊さまフアキールがおいでなすった

その御方はヒンドゥー教徒にやタクールまで

イスラム教徒にや偉大な聖者ビール——

ギリシユはタクールにお別れのごあいさつを申し上げた。タクールも又、ギリシユに札を返された。デベンドラはじめ信者たちは、タクールを馬車のところにお連れした。

デベンドラが応接間の南側の敷地に来てみると、近所の人が一人ベンチに横になって、まだ眠つて

(原典註2) ウベンドラ——ウベンドラ・ナート・ムコバッタエ。後にカルカッタで有名な出版業者となる。バスマ
ティー紙(新聞)の所有主。

(原典註3) アクシャイ——アクシャイ・クマール・セン。タクールの信者で詩人。バンクラ地方、マイナプール村
の出身。聖ラーマクリシユナの伝記を韻文の形式で書いて、その名を永久にとどめた。

いる。彼が、「起きなさい！ 起きなさい！」と声をかけると、その人は目をこすり、こすり、尋ねた——「大覚者様パラマシサヤールがおいでになつたのですか？」聞いていた皆はアハアハと大声で笑い出した。この人はタクールがここにいらつしやるずっと前から来て、待つていたのである。あまりに暑いのでベンチにごぞをひろげて横になつてゐるうちに、すっかり眠りこけてしまつたのだ。タクールは南神村ドフキネーシヨルにお歸りになる。馬車のなかで校長に向かつて上機嫌で話しかけられた。——「たくさんアイスクリームを食べたね！ お前、こんど寺へ来るとき、四、五杯持つてきておくれ」それから、こうもおつしやつた。——「いま、この何人かの若者たちに心が惹かれてゐるんだよ、若いナレンとブルナと、それからお前の親戚のと——」

校長「ドウイジャのことでございますか？」

聖ラーマクリシユナ「いいや、ドウイジャもいいが、あの兄さんの方が気になるんだよ」

校長「オー！」

タクールは上機嫌で馬車にゆられていらつしやる。